
墮天使の涙

ほしの すばる

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

墮天使の涙

【Nコード】

N2758E

【作者名】

ほしのすばる

【あらすじ】

筒井克彦は15歳の夏に、一人の少女と出会った。彼女との出会いが克彦の人生を大きく変えていく。

「あなたは神を信じますか？」
と聞かれたら、その頃の僕ならば間違いなく「NO」と答えた
だろう。

僕は神だとか悪魔だとかそういった非現実的なモノは一切信じて
いなかった。

だけど。

彼女のことを一言で例えるならば、それは『天使』だった。

近所の公園でいつも見かけた金髪の彼女。

初恋だったのかもしれない。

僕は初めて人を好きになった。

*
*

*

*

*

墮天使の涙

家が病院を経営しているというだけで、生まれた時から僕の一生
はずでに決めつけられていた。医者になり病院を継ぐという一生だ。
最初は僕もそれが当たり前なのだと思って、ずっと母さんの言う
とおりに勉強をしてきた。だって、母さんもそうしてきたと言っ
たから。（父さんは婿養子である）

だけど、中学生になってからそのことにだんだん疑問を持つよう
になっていった。どうして僕は医者にならなければいけないんだろ
う。どうして勉強ばかりしなくてはいけないんだろう。

僕は勉強ばかりしていたせいか、クラス男子に比べるとずいぶ

んとひ弱に見えた。肌も白くつて、腕も足もガリガリだった。体育も見学していることが多かった。

小五の時に一度だけ近所の子にサッカーしようと誘われたこともあったけど、母さんにダメと言われてやれなかった。本当はすごくやりたかったのに。あの日以来誰も誘ってはくれない。

あの時、母さんに怒られてでもやっておけばよかったと後悔する。友達だつてできてたかもしれないのに。おかげで、僕には友達と呼べる子はいなかった。母さんにみんなはライバルだと教えられていたせいもあるけど。

僕が幼稚園の時におじいちゃんが隠居して父さんに院長の座を譲った。それから父さんたちは忙しくつて僕と顔を合わせることも少なくなつた。

そして、おじいちゃんとおばあちゃんは田舎に引つ越してしまつた。

僕はいつもひとりぼっちだった。僕にとって両親って存在はないに等しかった。たぶんこれからも。

だから、僕はこれからの人生を両親のためではなく、自分のためだけに生きていこうと思う。

と偉そうなことを考えてみたけど、今まで母さんの敷いたレールの上を歩いてきた僕は、自分のために生きるという生き方を知らなかった。

僕はいつたい何をすればいいんだろう。

中学生最後の夏休みの初日。気怠い暑さに無理矢理朝早く起こされた僕はそんなことばかり考えていた。

ベッドの上の目覚まし時計はもう九時になろうとしている。

「この時間ならもう母さんたちいないか」

今では両親と顔を会わさないほうが気分的に楽になっていた僕は、両親が病院へ行った時間を見計らつて下へ降りる。病院の裏がすぐ自宅ってというのは便利なんだろうけど、僕にしてみれば不都合なことばかりだった。急病人がでればどんな時でも病院に行かなければ

ならない。そう、僕といっしょにご飯を食べている時でさえ。

僕は窓を閉めて、ポロシャツとジーパンに着替える。寝癖のついた髪を手ぐしでときながら、一階へ降りる。そのままリビングを通り抜けて台所へ向かう。

「！」

僕は思わず歩みを止めた。

病院へ行っているはずの母さんがリビングにいたのだ。

どうして？

とっさにリターンしようと思ったけど、けっこう豪快に階段を降りてきた気がする。気付いてないはずがない。

「かつひこ克彦」

案の定、革のソファに座ってこっちに背を向けていた母さんが僕の名前を呼んだ。

今更じたばたしても始まらない。

僕は母さんの前に座った。言いたいことだけ言っつてすぐにでも病院へ行くつもりなのか、母さんは診察着のままだった。

シヨートヘアに軽くパーマをあてた、どこにでもいそうな教育ママである。銀縁のメガネの下の目は明らかに怒っている。こんな怖い顔をした人が小児科の医者をやっているなんて信じられない。母さんの顔を見るだけで子供が泣きだしそうだ。僕だったら絶対泣いている。

「昨夜はどこに行ってたの？ ずいぶんと帰りが遅かったようだけ
ど」

「友達のとこ」

僕は短く答える。

「母さんが何を言いたいかわかってるわよね」

「……………」

昨日担任に呼ばれたことはわかっている。きっとそのことなんだろうけど、僕は何も言わなかった。

すると、母さんはテーブルの上に成績表を置いた。

「三年生になって急に成績が落ちてきてるじゃないの。どういうことなの？ このままだとこの医大にも入れなくなるって言われたわ。母さんもう恥ずかしくって、先生に合わせる顔がなかったわ」
「やっぱりそのことか。そんなこと言うためにわざわざ診察を遅らせるなんて。たったそれだけのために。」

うちの中学は私立だから高校まではエスカレーター式で上げれるんだから、今の成績で決めつけないでほしい。

「先生から聞いたわよ。克彦、あなた最近友成っていう子とよくいっしょにいるそうね」

先生、そんなことまで母さんに話すなんて。

「聞けば、その子のご両親は去年離婚して、今は母親と二人暮らししているとか。しかも母親はホステスをしているっていうじゃないの。そんな子とつきあっているから成績が悪くなるのよ」

母さんは一気にまくしたてて言う。

僕は目の前のテーブルに両手を思いっきり叩きつけた。

やっとできた友達なのに。

「僕の成績と友成くんは関係ないことだよ！ 友成くんのこと何も知らないくせに。母さんに友成くんのこと悪く言う権利なんかどこにもないんだっ！」

「克彦……。母さんになんていう口の聞き方をするの。前はそんなこと言うような子じゃなかったのに。やっぱり友成って子のせいだわ」

どうしてわかってくれないんだよ、僕の気持ちを。成績だけで人を判断するなんて、あんまりだ。

僕はこの時初めて母さんに殺意にも似た感情の怒りを覚えた。

「母さんは僕のことなんか何も考えてくれてないんだね。ただ病院を大きくすることしか考えてない」

「何を言ってるの。母さんはいっだって克彦に幸せになってもらうことしか考えて」

「うそだっ！」

僕は母さんの言葉をさえぎった。上っ面だけの愛情論はもう聞きたくなかった。

「僕は母さんの思い通りに動く人形なんかじゃないんだっ！」

僕は今までのうつつぷんをありったけこめて叫ぶと、走って家を飛び出した。

あの時、母さんがどんな顔をしていたかなんて見る余裕すらなかった。

僕はその足で友成さんと待ち合わせしている隣町のコンビニに向かう。

ちょっとだけ遠回りになるけど、公園のほうを通っていく。

彼女、いるかな。

横目でちらちらと公園の中を見ながらゆっくりと歩いていく。視界の隅に風に揺らぐ金色の髪が見えた。

今日はジャングルジムに登っている。何やってるんだろう。よく見えない。けど、あんまりジロジロと見てたら怪しまれるし。気が付いたのは一カ月ぐらい前だった。登下校でいつもこの公園の横を通ると、いつも彼女がいた。

腰まである波打つようなキレイな金髪。

碧色の大きな瞳。

いつも笑みを絶やさないピンク色の唇。

ピッチリとした白いTシャツの上からジージャンを羽織り、同色のショートパンツ姿が彼女の体を健康美に見せてくれる。だけど、あの格好つけてけっこう男から見れば刺激的すぎる気もするんだけど、男の人がからんでいるのを見たことがない。きっと彼女の高貴な才一ラに俗物たちは近付くことができないんだ。僕もその俗物のひとりなんだけど。

どこの人なんだろうか。外見からして日本人じゃないことだけは確かだ。

気になりながらも僕はいつもと同じく素通りしていった。

コンビニに行く、すでに友成くんは来ていた。ブルーのチエツクのシャツが外からすぐ目についた。友成くんは雑誌コーナーで車の雑誌を立ち読みしていた。

「ごめん、遅くなっちゃった」

店に入ると、僕は友成くんの所へ行く。

身長は友成くんのほうが高いけど、彼もやせ型でこれといって特徴のない顔立ちをしている。

「いいよ。俺も今来たところだから」

友成くんは見ていた雑誌を元に戻す。

友成くんは両親の離婚が原因で一気に成績が落ちたせいでクラスのみんなからも先生からも相手にされなくなっていた。

僕たちが通う中学は私立の進学校で、成績の悪い者は先生から生徒扱いされなくなる。

友成くんはお母さんにやめたいと何度も言ったらしいんだけどやめさせてくれないらしく、高校もそのまま続けて行かせる気ではないらしい。そのため友成くんのお母さんは高い学費を稼ぐためにホステスになったと聞いた。けど、母親のその想いは友成くんにとっては重荷でしかなかったらしい。その辺の境遇がよく似ていた。母さんは僕に能力以上のものを求めてくる。子供の意志などそっこのけで。

友成くんの席が僕の後ろだったせいもあって、お互いのことを話していくうちに僕たちは意気投合した。

今まで友達と呼べる存在のいなかった僕にはとてもうれしいことだった。

世間知らずだった僕を、友成くんはいろんなところへ連れていってくれた。ゲームセンターや映画、ファーストフードのお店。すべてが僕にとっては新鮮だった。

「朝メシ食った？」

友成くんが聞いてくる。

「まだなんだ」

「じゃあ、ここで何か買つてく？」

「そうしたいんだけど、さっき母さんとケンカして飛び出してきたからサイフも何も持つてきてないんだよ」

「え、そうなのか？」

ちよつとガツカリしたという反応だった。

「まいったなあ。俺も今日はまだおふくろが帰ってきてないから金もらつてないんだ」

「それなら仕方ないよ。あきらめよう」

そう言つてコンビニを出ようとした時、友成くんがいきなり僕の左腕をぐつと後ろに引つ張つた。

そして、友成くんは僕にそつと耳打ちする。

「あきらめることなんかないさ。盗ればいいんだから」

「えっ？」

僕は自分の耳を疑つた。盗るつて、ようするに万引きするつてこと？

「よくないよ、そういうのつて」

「何言つてんだよ。腹減つてんだらう」

そりゃあ確かにお腹は空いてるけど、やっぱり盗むのはよくないことだよ。

「簡単なんだぜ。大丈夫だつて。バレやしないよ」

パンパンと僕の背中を叩いて、友成くんはパンとかが置いてあるほうへ歩いていく。

店員さんは今はレジに男の人がひとりだけ。お客は僕らの他に二人、三人。

友成くんは平然とした顔でパンを選んでる。レジの目の前なのに、すぐに見つかつちやうよ。

ドキ……ドキ……ドキ……ドキ……ドキ……。

ドキドキドキドキ。

見ている僕は心臓が破裂しそうだった。

お客のひとりかレジに行ったと同時に、友成くんはパンを二個シヤツの中に素早く入れこんだ。

や、やってしまった。

とてつもない不安と恐怖が僕の心を支配していく。きっと僕の顔はすぐく引きつっているんだと思う。僕は顔を店員さんに見られないように外を向き、手近な雑誌を手に取る。

と、ふいに肩を叩かれる。

どっきん！

「な、簡単だっただろう」

友成くんだった。

はあ、心臓が止まるかと思った。

僕はキョロキョロと視線を泳がしながら雑誌を戻す。

「筒井もやってみるよ」

「い、いいよ。僕にはそんな度胸ないし」

「ちえ。いくじないな」

友成くんは僕を蔑むように見ると、スツと何事もなかったかのようにならぬを出ていく。友成くん少し変わったような気がする。

友成くんもどちらかという臆病なほうだったのに。お母さんとうまくいってないのかな。

「！」

友成くんが出た後に、すぐにコンビニの店員さんが出ていく。僕は心配になつて後を追う。

友成くんは店員さんに呼び止められた。

やっぱり見られてたんだ。

僕は膝がガクガク震えて友成くんの所へ歩いていくことができなかった。

店員さんは友成くんのシヤツをズボンから引っ張りだす。当然さつき盗んだパンが二個落ちる。

「どうということかな、これは」

背高のつばの細長い顔をした店員さんは、怒りも露にして友成くんを見下ろしている。

「中学生か？ 高校生か？ こんなことしちゃいけないことぐらいもつわかる年だろう！」

問答無用と言わんばかりに店員さんは怒鳴っている。

「う、ごめんなさい」

友成くんは自分の犯した過ちに気付いたのか、ぼろぼろと涙を流して何回も謝る。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「謝ってすむことじゃないだろう！ 警察を呼ぶからな。こっちへ来なさい！」

「ごめんなさいっ！ ぼく……彼に命令されて仕方なくやったんです！」

友成くんが僕を指差した。

えっ……？

「言うこときかなきゃ殴るって。だから、ぼく……。お願いですから、警察だけは許して下さい！ お母さんに心配かけたくないんです！」

友成くんは店員さんにすがりついて懇願する。店員さんの視線が僕に移る。

うそだ。僕はそんなこと言ってない。

「ったく、最近の子供はおとなしい顔して何考えてんだ！」

憤怒の形相で店員さんが僕のほうへ歩いてくる。そのすきをついて、友成くんは走って逃げていく。

そんな……。

「どこの学校だ？ 名前は？」

ちがう。僕は何もやってない！

叫びたくても声がでなかった。

店員さんが僕をつかまえようとだんだん近付いてくる。

僕は何も悪いことしてないのに、どうしてそんな怖い目で僕を見

るんだよ。

体の震えが止まらない。

店員さんの手が僕に伸びてくる。

いやだっ！

こっちへ来るな！

「こら、待てっ！」

気が付いたら、僕の足は動いていた。店員さんの呼び止める声に
怯えながら、僕は懸命に走った。

追いつかれたらどうしようという恐怖に怯えながら、振り返ることなく僕は走った。

ただただ走った。何度も足をもつらせて転ぶ度に、僕は立ち上がり走った。

足は重く、もう息をするのも苦しかった。

止まりたい。楽になりたい。

でも、止まれば追いつかれて捕まってしまう。それだけはいやだ。だって、僕は何も悪いことはしていないんだから。

どれくらい走ったんだろうか。ずいぶん走った気がする。

「あ！」

また僕の足はもつれてしまい、不様に転倒してしまった。今度はもう起き上がることはできなかった。

足音は聞こえない。追っては来てないみたいだ。

僕はあおむけになったまましばらく動けなかった。汗がどーっと吹き出る。爆発寸前の心臓を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸を繰り返す。夏の日差しが僕の体をジリジリと焼いている。アスファルトが熱い。何だかサンマにでもなった気分だ。僕は太陽の光の強さから顔を両腕で隠した。

周りには人はいないのか、誰も声を掛けてこない。まあ、いたとしても声を掛けてくる人なんかいるわけないと思うけど。そのほうが助かる。

やっと呼吸が落ち着いてきた僕は半身を起して周りを見ると、見慣れた近所の公園があった。どうやら家の近くまで帰ってきてたらしい。単純に考えても五キロは走ったはずだ。体育では満足に百メートル走も完走できなかった僕があれだけの距離を全力で走ったなんて。何度も転んだりはしたけれど。こういうのを 『火事場の

クソ力』っていうのかな。

僕はゆっくりと立ち上がると、重くなった足を引きずりながら公園に入った。膝がガクガク笑っている。

僕は水を求めて、中央にある水飲み場へ行く。蛇口を勢い良くひねって水を飲む。その後顔に顔を洗う。ポロシャツは汗でびっしょりで気持ち悪かったけどぬぐわけにもいかず、僕は我慢した。

僕は一番手近にある木製のベンチに座った。

一息ついたとたん、僕はあの恐怖を思い出した。

顔を覚えられてしまっただろうか。もしも学校がばれて通報されていたらどうしよう。もう隣町には行けない。いつまたあの店員さんに会うかわからない。

僕の中でどんどんと不安が広がっていく。

震えが止まらない。

それにしても。

「友成くん、どうしてあんなうそを……」

無理にでも止めなかった僕も悪かったのかもしれないけど、やったのは友成くんの意志だ。それを僕に罪をきせようとするなんて。

「友達だと思ってたのに」

初めてできた友達だった。それなのに裏切られるなんて。友達ってこんなに薄っぺらいものなんだろうか。

友達っていったい何なんだろう。いつしよに勉強したり遊んだりするだけの存在なのかな。

僕にはわからなくなってきた。母さんがみんなのことをライバルだと思えと言ってたのはあながちうそじゃなかったのかもしれない。自分のために生きるなんて思ってたけど、何だか面倒臭くなってきた。もうどうでもいいや。

僕はすっかり人生を投げ出していた。

「ねえ、どこか痛い？」

どこかずれたイントネーションで女の人が話し掛けてきた。

僕は顔を上げた。

「！」

例の彼女が僕の目の前に立っていた。

「どこか痛いのか？」

彼女は中腰のまま僕に顔を近付け、もう一度聞いてくる。

僕の心臓は違う意味でまた爆発寸前となった。

鼓動が、脈打つ速度が速くなっていく。血が一気に頭のとっぺんまで昇っていく。

まだいたんだ、彼女。不覚にも全然気付かなかった。午前中はこの公園は子供たちは来ないこと知ってたから安心しきってたのに。

僕はベンチの中央から左端へ慌てて移動する。すると、彼女は空いた僕の右側へちょこんと座る。

「さつき転んだでしょう。大丈夫？」

見られてたんだ。僕が転んだ時から。

「だ、大丈夫です」

僕は恥ずかしくて彼女の顔をまともに見ることができなくてうつむいたまま答えた。

「そう、よかつたね」

彼女は明るい声で言う。

初めて聞いた彼女の声。イメージしてたよりもちよつと甲高いけど、キレイな声だ。イントネーションが変だけど、はっきりと日本語を話している。

せつかく彼女のほうから話し掛けてきてくれたというのに、僕は何を話したらいいのかわからなくてただ黙ってうつむいていただけだった。視界に入ってくるのは、彼女の足元だけだった。素足にスニーカーを履いている。

千載一遇のチャンスだというのに。

単純だな、僕は。ついさつき友成くんに裏切られて投げやりになつてたのに、彼女と話ができただけでこんなにも感情が高ぶるなんて。こんなもんなのかな、人間の感情なんて。

彼女はどこへ行くわけでもなく、僕の隣にずっと座っている。僕

の体は緊張のあまりカチカチに硬くなっていた。中学の受験の時ですえこんな緊張したことはなかったのに。

「私、グロリア。君は？」

「つ、筒井克彦です」

緊張して思いつき声が上がっていた。顔は今も上げることはいかない。けど赤くなってるのわかつちやうだろつなあ。

意識すればするほど顔が熱くなっていくのがわかる。

「ねえ、カツヒコは神様を信じてる？」

それはあまりにも唐突で意外な質問だった。この僕にそういうことを聞いてくるなんて。

もしかして彼女は怪しい宗教集団の勧誘者？ かわいい顔してそうやって男の人を入信させてるのかもしれない。

僕は再び友成くんの裏切りを思い出した。友達だと思っていた彼に裏切られたんだ。さつき言葉を交わしたばかりの彼女が信用できるはずがない。好きだと言っても、僕は彼女の名前以外は何も知らないんだ。外見にだまされているのかもしれない。

僕の心の中で疑心暗鬼が広がっていく。

「悪いんですけど、僕はそういう非現実的なモノは信じてないんです」

僕はその場を離れようとして立ち上がった。けど、まだ膝が笑っていて、どすとベンチに腰を落とす。

カツコ悪い。

「どうして？」

彼女は僕が立ち上がったことには何も触れずに聞いてくる。どうしてって聞かれると答えに困る。

「うちにはサンタクローズが来たことないから」

考えた挙げ句に出た答えがこれだった。今時小学生でも言わないようなセリフを真顔で言っている自分が情けなかった。

バカにされると思ったのに、グロリアは笑わなかった。

「そんなことないよ。きつとカツヒコがわかんなかっただけ」

「……………」

「サンタクロースは天使と同じで神様の使いなの。いつだってみんなの近くにいるよ。そして、悪魔は……………」

「そんなことがどうして言い切れるんで」

僕は言葉を切った。顔を上げると、目の前に真剣な表情の彼女の顔があった。吸い込まれそうな大きな瞳に、僕はこれ以上言い続けることができなかった。

その時の僕はすぐ間の抜けた顔をしていたんだと思う。だって、グロリアは僕の顔を見てくすつと笑ったから。

「知ってた？ 人間も大昔は天使だったんだよ。人間はね、喜怒哀楽っていう感情を持ってしまったから神様に地上へ落とされちゃったの。つまり堕天使になっちゃったってこと」

「はあ」

僕はぼつ然としながらグロリアの話聞いた。

「だけど、私は人間が大好き」

「僕は嫌いだ」

うれしそうに話すグロリアに水を差すようで申し訳なかったけど、僕は続けた。

「人間は弱くてずる賢くて、平気でうそついたりして人を裏切るんだ。そして、人に無理矢理自分の考えを押しつけて思い通りにさせようとする。何が天使なもんか。人間なんてみんな悪魔なんだよ！」

感情が高ぶってきたのか、僕の声は次第に大きくなっていった。どうして僕はこんなことを話してるんだろう。グロリアの言葉にうまく乗せられてしまったんだろうか。

「カツヒコの言う通りかもしれない。でも、人間は悪魔じゃないよ。悪魔はもつともつと狡猾で残酷。純粋な人の心を変えていくの。だから私は守りたいの。ミカエル様のようにみんなの心を」

「ミカエル？」

ミカエルって確か大天使の名前のはず。となると、やっぱりグロリアはクリスチャンか何かだ。でないし普通の人はそういうこと言

考えてみれば、朝から飲まず食わずで全力疾走してきたんだ。お腹の虫が鳴くのも当たり前のことだった。

恥ずかしくてできることなら走って逃げたかったけど、まだ足が思うように動いてはくれない。

「いつもよりはちよつと早いけど」

独り言を言うと、彼女も立ち上がる。

「行こつ」

グロリアはいきなり僕の右腕をつかんで走り出す。

「ちよ、ちよつと」

軟弱な僕は彼女の手を振りほどくことができず、そのまま引きずられていく。満足に走ることでできない僕は何度もつまずきながらついていく。

最悪だ。

絶対に今日は厄日なんだ。

どこへ行く気なんだろう。もしかして、教団の本部とかに連れて行って洗脳とかして強引に信者にさせてしまおうとかってつもりなのではないのだろうか。

冗談じゃない。警察もいやだけど、わけのわかんない宗教に入信させられるのはまっぴらごめんだよ。

けど、今の僕にはグロリアに抵抗するだけのパワーはなく、為すが為されるままだった。お腹が空きすぎたのと、夏の日差しの強さで僕は今にも倒れてしまいそうだった。心臓がどつきんどつきんしている。このまま走り続けたら僕の心臓は停止してしまうかもしれない。

それでもいいかもしれない。この世に別に未練とかって全然ないし、いっそのこと死んでしまったほうが楽かもしれない。煩わしい

ことからすべて解放されるし。次に生まれてくる時は何がいいかな。人間はもういやだ。犬や猫になつて人間のペットになるのはいやだし。面倒だから生まれたいほうがいい。死んだらずっと死んだまま。これでおしまい。それが一番かもしれない。

最初から生まれてこなければよかつたんだ。

朦朧とする意識の中でそんなことを考えていると、急にグロリアの足が止まった。勢いのついている僕の足はすぐに止まることのできなくて、グロリアの背中にぶつかつて止まった。

どうやら目的地に着いたらしい。

くたくたになつた僕はすぐその場に座りこんだ。できれば寝転びたいくらいだ。

ずいぶん走つたような気がしたけど、周りをみれば見慣れた町内の住宅街だった。そして、目の前にはできてまだ間がないといった感じの真新しい二階建の白亜の建物があつた。その建物を囲むように左右にずーっとブロック塀が続いている。敷地面積でいったらうちの病院ぐらいはあるかな。いや、それ以上かな。

教会じゃないみたいだけど、何だろう。

「養護老人ホーム……希望園？」

門柱のプレートを見て、僕は呟いた。そういえば、近くに老人ホームができたって誰か言つてたなあ。

けど、どうしてこんな所に？ グロリアのおじいさんかおばあさんがいるのかな。

も、もしかして老人ホームっていうのは世を忍ぶ仮の建物であつて、実は地下とかに悪徳宗教の隠れ家があるなんていうんじゃないだろうな。

グロリア「宗教の勧誘という結びつきが僕の頭から消えなかつた。」「ぼ、僕をどうするつもりなんだ？」

肩で息をしながら、僕は強気にでてみた。こつちが弱気を見せたら相手の思うツボだ。きつと入信させられてしまふにちがいない。だけど、グロリアはそんなこと関係ないといった感じでニコニコ笑

っている。

「お腹空いてるんでしょう?」

長い足を折り曲げてグロリアは、僕と同じ視線で話し掛けてくる。

「空いてなんか」

ぎゅるるう。

タイミングがいいのか悪いのか、また僕のお腹の虫が騒ぎだした。あまりにも素直すぎるお腹の虫を恨めしく思った。

「ほらあ。がまんは体によくないよ」

くすくすと笑いながら僕の手を引いて立ち上がらせる。子供扱いされている。どうせ彼女のほうが年上だろうからいいんだけどね。

僕はそのまま中へ入っていく。

新しい建物特有のきつい二オイが鼻についた。玄関先は段差が全
くなく、少し傾斜をつけている。うちの病院といっしょだ。どうし
てだろう。

「あら、グロリアちゃん。もう来てくれたのかい」

車イスに乗った白い髪のおばあさんがこつちに気付いて玄関にや
ってくる。おばあさんは慣れた手つきで車イスをきこきこ走らせて
くる。

「こんにちは、ミサエさん！」

グロリアは両手を元氣よく振り上げる。自分のおばあさんに

「みさえさん」っていうのは変だと思うのだけど。

「今日は早いんだねえ。せっかく玄関で待ち伏せしようと思ってた
のに」

「みんなに早く会いたくって」

「うれしいこと言ってくれるねえ」

祖母と孫の会話とは思えなかった。

グロリアは車イスの後ろに回ると、取っ手を握って車イスを押し
て上がっていく。

そうか。段差がないのは車イスのためだったんだ。しかも、傾斜
があまりないから車イスを押し上げるのも苦にならない。

ちゃんと考えてるんだなあ。あ、これがバリアフリーっていうの
かな。

グロリアはおばあさんと会話を弾ませながら先に進んでいく。

逃げるなら今がチャンスかもしれない。

僕は気付かれないようにそおうとリターンする。そして、足音を
たてないように一歩一歩ゆっくり歩いていく。たかが二メートルく

らしいの玄関がとてつもなく長く感じた。

出口まで後一步というところで、

「カツヒコー、早く来ないとお昼食べれなくなっちゃうよー」

僕を呼ぶグロリアの声。

がくつ。

僕は肩を落として再度Uターンすると、グロリアの後を追う。

後からよく考えてみれば、そのまま逃げようと思えば逃げることでできていたはずなのに、どうして逃げなかったんだろうか。

老人ホームの中はベージュを基調としていた。壁には風景画とか動物の写真とか、とにかく心を和ませるものが多く飾られていた。オブジェや観葉植物も所々に置かれている。腰ぐらいの位置には手摺りがついている。老人ホームってずいぶん陰気臭いイメージが強かったけど、これじゃあまるで芸能人のお宅ご拝見を見ているみたいなものだ。お金を掛けてるといった印象を受けた。キレイで設備がよければ人は集まってくるっていう考えなんだろうなあ。この経営者も母さんと同じだ、きっと。人を人とも思わないでお金儲けの道具としか見ていない。

「グロリアちゃん、今日は何を食べるかねえ」

「うーん、今日はオムライス食べたいなあ」

「よし、今日は洋食屋に行ってみるとするかい」

そんな話をしながら裏口のほうから出ていく。外に連れ出したりしてもいいのかな。

ホームの裏側には別棟があった。それはどう見てもレストランだった。その横には和食屋やラーメン屋まである。表からだともホームに隠れて全然見えなかった。

グロリアは車イスを押ししてレストランに入っていく。やはりこも段差はなく、車イスの出入りが見易いようにしてある。

中に入ると十席ほどの席はもう満席だった。お客はおじいさんやおばあさん・・・たぶん老人ホームの人たちばかりだった。

「おー、グロリアちゃん」

「こんにちはー、ゲンさん」

みんながグロリアに話し掛ける。

「わしらあもう食べたからここへ座りなさい」

おじいさんたちが席を譲ってくれる。

「ありがとう、ゲンさん」

「なんのなんの。それよりも後で遊戯室へ必ず来ておくれよ。待つとるからのう」

「うん」

「もうヘタな演奏は聞き飽きたよ」

車イスのまま席についたおばあさんが毒舌する。

「芸術のわからん人には聞いてもらいたくないもんじゃな」

別のおじいさんが負けずと言り返す。

「そういうことは腕を上げてから言ってもらいたいもんだよ」

「口の減らん人じゃよ」

「ゲンさんたちの負けー」

ふおっふおっとな笑いながらおじいさんたちはレストランを出ていった。

「ミサエさんに口で適う人はいないんだよー」

「これ、余計なことを言うんじゃないよ」

「はいー」

ちょっと口はきついけど、母さんのきつさとはまたちがった。逆に親近感を持ってしまう。

「ところで、ぼつやはグロリアちゃんのぼついふれんどかい？」

ぼつやはあんまりだ。しかも、ボーイフレンドだなんてとんでもない。

「あ、いえ……」

「やだあ、もうミサエさんったらー」

否定しかけたところへ、グロリアが割り込んできた。きゃっきゃと笑うだけで否定も肯定もしなかった。僕としてははっきりと否定しておきたかったんだけど。

僕はテーブルの上にあったメニュー表に目をやる。品目はやはり普通のレストランとちがって少ない。

「え？」

思わず声を出してしまった。値段が書いてある。ってことは、お金がいるってことだよな。老人ホームの中にあるからつきり無料だと思っていたのに。普通のレストランに比べたら安いのは安いみたいだけど。お金を持ってない僕がここで食べれるわけないじゃないか。

「安心して。ミサエさんのおごりだから」

グロリアは僕の思っていたことがわかったのか軽くウインクしてみせる。

おごりって言われて素直に「はい」と言えるわけがなかった。食べた後に無銭飲食でつかまるのはいやだ。もうあんな怖い思いはしたくない。

僕が黙っていると、グロリアは厨房へ行き、

「オムライス三つね」

と、勝手に注文する。

「ちよつと、そんな勝手に」

「嫌いだった？」

「そついう問題じゃなくて」

「おいしいのよ、ここの料理。きつとカツヒコも大好きになるからプラスチック製のコップに水を入れてきて、グロリアはあっけらかんと言う。

もう逃げられない状態に僕は追い込まれていた。

墮天使の涙

しばらくして、丸いお皿に乗ってオムライスがやってきた。

「いただきまーす」

グロリアとおばあさんはスプーンを手に取り食べ始める。

僕はオムライスをじつと見ていた。黄色い卵の上にかかったケチヤブが僕の食欲をそそる。お腹の虫も騒ぎだす。

だめだ。もうがまんできない。

僕はスプーンを手に取ってオムライスを一口食べてみた。

「おいしい」

自然と口からそんな言葉が出た。

「でしょう。このシェフは腕だけはピカ一なんだから」

「おいおい腕だけかい？」

厨房の中からシェフらしき男の人が顔を出す。小太りでまん丸いメガネをかけた中年の人だった。

「人間何かひとつは取り柄があるって言うもんね」

「せっかくグロリアちゃんのために腕を奮って作ったっていうのにつれないこと言ってくれるなあ」

「だめですよー。みんなのために腕を奮わなくっちゃあ」

「その通りじゃあ」

「手を抜いたらもう食いにきてやらんぞ」

グロリアの言葉を聞いた周りの人たちが賛同の声を上げる。

「こりゃあとんだやぶへびだ」

シェフは肩をすくめて厨房の奥へと引っ込んだ。

でも、確かにおいしい。お腹が空いていた僕はあつという間に食べてしまった。

初めて食べたオムライス。母さんはこういうの作ってくれなかつ

たからなあ。

「もう食べちゃったのかい？」

おばあさんはキレイになった僕の皿を見て言う。おばあさんのはまだ半分ぐらい残っている。

「よかつたらこれもお食べ。あたしにやちよつと多いんだよ」「でも」

「年寄りが手をつけたものがいやでなかったらの話だけどね」

「そんなことないです」

僕は差し出してくれた皿を受け取る。普段なら僕ももうお腹いっぱいになってはいるはずなんだけど、走ってばかりだったせいはまだ胃袋に余裕があった。

「若い子の食べっぷりはやっぱりちがうねえ。見てて気持ちがいいよ」

「ありがとうございます」

「おや、まあ」

急におばあさんはビックリしたように僕を見る。

「今時の子にしてはちゃんと礼が言えるんだねえ。うちの孫なんか小遣いやつてもありがとうのひとつも言いやしないのに。お母さんのしつげがしっかりしてるんだねえ」

感心したように言う。

母さんには勉強とあいさつだけは怠ってはいけないと言われてきただけで、しつげがしっかりしているのかどうかは別問題だと思う。

「ごちそうさまでしたー」

食べ終えたグロリアは顔の前で両手を合わす。

「おばあさんの孫のほうがよっぽど礼儀がいいですよ」

と、グロリアを見る。僕にしては精一杯の誉め言葉のつもりだった。けど、ふたりはきよとんとした顔をしたかと思うといきなり笑い出す。

「どうやら勘違いしているようだね。グロリアちゃんはあたしの孫じゃないよ。考えてもごらん。あたしや生粋の日本人だよ」

確かに。どう見たってグロリアに日本人の血が混じっているようには思えない。

だから、グロリアはおばあさんのこと名前で呼んでたんだ。

「ところで」

さっきまで笑っていたおばあさんの顔が急に険しくなる。

「あたしのごとは『おばあさん』ではなく、『ミサエさん』と呼んどくれ」

「みさえ、さん？」

「そう、ミサエさんよ」

と、グロリア。

「おばあさんなんて他人に呼ばれるとどうも年寄りくさくなってしまっからねえ」

でも、さっき自分のこと年寄りって言ったたような気がするんだけど。

「そついえば、まだ名前聞いてなかったねえ」

「筒井……克彦です」

「つつい？ つついつて、もしかしてあの筒井病院の子かい？」

「はい、まあ」

いやだった。そついつ風に言われるのが。

「そつかいそつかい。筒井医師のねえ。言われてみればどこことなく感じが似てるよ」

うんうんと、おばあさん……みさえさんがうなずく。

「父さんを知ってるんですか？」

「当然だよ。ここで医師を知らない人間なんていやしないよ。何たってうちのホームの主治医なんだからねえ。毎週日曜日には往診にも来てくれるんだよ」

「そつなんですか」

知らなかった。いつも日曜日はいないとは思っていたけど、まさかここに往診に来てたなんて。息子よりも患者が優先ってわけだ。

「こりゃあみんなに報せてやらないとね。お金ここに置いとくから

ね

みさえさんは巾着袋からサイフを取り出し、テーブルの上にお金を置く。

「あ、あの」

「いって。医師にはいつも世話になってるんだ。これぐらい安いもんだよ」

「すみません。ごちそうさまでした」

みさえさんはグローリアが車イスを押すよりも早くきこきここと自分で上手に車イスを回転させてレストランを出す。

それをぼう然と見送る僕。

「すごいでしょう？ ここの人たちってみんな生き生きしてるのよ」
後は死を待つだけの老人が生き生きしてるなんて想像もできなかった。

けど、それは数分もしないうちに認めるはめになる。

ロウカを歩いていると音楽が聞こえてきた。モーツァルトだとい
うのはわかるけど、さすがに曲名までは覚えていなかった。

僕たちは遊戯室に向かっていた。一階の半分以上を占めているそ
の部屋にホームの人たちは集まっていると聞いた。

みさえさんを追って中に入る。テーブルとソファアのセットが十
組ほど等間隔に並べられていた。そして、前に舞台があつて、そこ
には楽団がいた。CDでもかけているのかと思つたら、おじいさん
たちの生演奏だったのである。さつきレストランで席を譲ってくれ
た人たちだ。

ピアノやバイオリン、フルートにチェロ。
いろんな楽器が奏でるメロディにみんなが聞きいつていた。
そこへ。

パンパン。

みさえさんが手を叩いて演奏を中断させる。当然みんなは何事か
とこつちを見る。

「みんな聞いておくれ。今日は何と筒井医師の息子さんが遊びに来
てくれたんだよ」

別に遊びに来たわけではないんだけど。ただグロリアに強引に連
れてこられただけで。けど、そんなことを知るはずもないみんなの
視線が僕に集中する。

勘弁してほしい。

「そりゃあいつもより気合い入れて演奏せんといかんのう」
バイオリンを弾いていたげんさんが言うと、指揮をしていた別の

おじいさんがタクトを振り上げた。

それぞれの楽器がやさしいメロディを奏でます。何て楽しそうなんだろう。僕が見てもわかるくらいに。

「カツヒコ、こっちだよ」

気が付くと、グロリアはすっかりみんなの輪の中に溶け込んでいた。

僕は呼ばれて、空けてくれたソファアに座った。

みんなは僕に父さんへの感謝の言葉ばかりを繰り返してきてくる。僕にはそれがたまらなくいやだった。僕は両親に感謝したことなんか一度もなかった。ふたりとも病院のことばかり考えていて、參觀日だって運動会だって一度も来てはくれなかった。

僕はいつだってひとりぼっちだった。

父さんは母さんに何も言っただけじゃなかった。婿養子の父さんは母さん頭が上がらないんだ。きっと父さんは病院が目当てで母さんと結婚したんだ。だからきっと僕のことなんかどうでもいいんだ。母さんだってそうだ。僕を人間として見てくれたことなんかない。

「そんなことないよ」

「えっ？」

グロリアだった。まるで僕の心でも読んだようなタイミングだった。

「今……」

と言いかけた時。

「今日はまた一段とにぎやかだな」

上下のトレーニングウェアを着た男の人が入ってきた。父さんと同じ年ぐらいかな。でも、ガリガリにやせている父さんとはずいぶんと対照的でガツチリとした体格をしている。このホームで働いている人かな。

「あ、園長。こんにちはー」

グロリアは元気よくあいさつする。

さっきのは何だったんだろうか。単なる会話の偶然だったのかな。

聞きそびれてしまった。

「お、グロリア。いつも元気だな」

「だってそれだけが私の取り柄だもん」

「じゃあオレといっしょだ」

がはははと豪快に笑う園長さん。

「まあ、園長。いいとこに来たよ。聞いておくれよ。筒井医師の息子さんだよ！」

みさえさんは少し興奮していた。

「そりゃあ珍しいこともあるもんだ」

園長さんは興味津々に上から僕を見下ろす。

「初めまして。お邪魔してます」

僕は軽く会釈する。

「初めまして、つて。覚えてないかな。何回か君の家に行ったことあつただけど」

「え？」

「君のお父さんにはこのホームを作る時にずいぶんと相談に乗ってもらったからなあ。主治医まで頼んでしまったし」

そういえば、ここ何年か父さんを何回も尋ねてきたおじさんがいたつて。邪魔になるからつていつも二階へ追いやられていた。この人が父さんに主治医なんか頼まなければ……。

「おいおい。そんな恨めしい顔で見ないでくれよ。無理を承知で主治医頼んだのは悪かつたつて思つてるんだ」

どうやら今の感情が顔に出ていたらしい。園長さんはすまなそうに僕の頭をなでた。ここでも子供扱いである。

「大丈夫だよ、園長。カツヒコはお父さんを取られてすねているだけなんだから」

グロリアが勝手なことを言う。どうして僕がすねなきやならないんだよ。今更父さんなんていてもいなくても同じなのに。

「克彦くん、よかつたらふたりで話をしないか？」

「私は？」

「グロリアはダメ。これは男同士の話し合いだからな」

「園長のいじわるう」

グロリアはぷうと口を尖らせる。

「放っておきよ、グロリアちゃん。むさくるしい男たちの話に首を突っ込むことはないよ」

みさえさんが毒舌でグロリアをたしなめる。

「さすがミサエさん。よくわかってるよ」

「おだてたって何にもでやしなないよ」

「わかってるって」

僕の意志はすっかり無視されて話が進んでいたため、断るチャンスを失ってしまった。

園長室は遊戯室の隣にあった。一度口ウカへ出なくても直通で行けるようにドアがある。僕は園長さんに促されてそこから入った。広さはうちの学校の校長室と大差なかったけど、室内の半分は畳になっていた。その上にはいつでも寝れるように布団が敷いてる。

後は小型の冷蔵庫とテレビ。何だよ、この部屋は。

「やっぱり驚いたか？ ここはオレの住まいにもなってるな。どうもベッドは苦手なもんで」

「はあ。家族の人は何も言わないんですか？」
「子供がいたら不憫だよ。」

「気ままな独身貴族やってきたからな。そういうことを言ってくれる人は残念ながらいないんだよ。ま、適当に座ってくれよ」

園長さんは掛布団と敷布団をいっしょにまとめて折り畳むと端へと追いやる。

僕はスニーカーをぬいで畳の上に座る。

「あの、話って何でしょうか？」

「ないよ」

僕の横にあぐらをかいて座ってけろつとした顔で答える。

「えっ、でも……」

「君が聞きたいことがあるんじゃないかと思っただけだから」

「僕が？」

僕は怪訝に思った。別に聞きたいことなんかあるわけがない。

「ここはオレと数人の仲間が出資して作ったホームなんだ」

何も言わない僕に対して、園長さんは聞いてもいないことをしゃべりだす。

「裏の食堂街へ行ったか？」

僕はとりあえずうなづく。

「あそこの料理人が他の出資者でな。みんな同額出したんだから園長はみんなでいいと思ってたんだけど、そんなのはおかしいって。で、仕方なく肩書きだけオレが園長になったんだ」

「ここは国が経営している老人ホームじゃないから資金面ではけっこう苦労したと言う。」

「だから、お金を取るんですか？」

「お金？」

「レストランですよ。普通老人ホームと違ってカロリー計算とかした食事を出すって聞いてます。家族からお金をもらっておきながらまたみんなからお金を取るんですか？」

「あ、ああ。あそこで払ってるのはおもちゃのお金だよ」

「おもちゃ？」

僕はますます怪訝な顔をしてみせる。

「オレたちは老人ホームを人生の終着点とは思ってないんだ。むしろ新しい出発点だ。家族から離れて自立して毎日を楽しく生きる。

決められた食事よりも自分でお金を払って好きなものが食べられるのはうれしいことだろう。もちろん、カロリー計算もしているさ。お金を使うことってみんなにはハリになるんだ。それが例えおもちゃでもね」

「何かままごとみたいですね」

「それでもいいじゃないか。楽しければ」

園長さんはあっけらかんと言う。どうやらこの人は楽しければ何をやってもいいという考えも持ち主らしい。単純というか幸せ者というか。

「生きがいを見つけて楽しく生きる。これは筒井が言ったんだ」

「父さんが？」

「筒井は子供の頃におじいさんが寝たきりになって家族が辛い思いをしてきたのを見てきてるからね」

僕にとってはひいお爺さんだ。確か僕が生まれる前に老衰で死ん

だつて聞いている。

「寝たきりになれば家族が苦しむ。それを知っているから奴は医者になった。これ以上自分たちと同じ思いをする人を増やすまいとして。けど、医者には限界がある。だから、ここで年寄りたちに生きる活力を与えてくれって。そうすれば、老いはなくなるんじゃないかって」

父さんがそんなことを。

「でも、それは理想じゃないですか？」

「そうでもない。ミサエさんを見ただろう。あの人はここへ来た時は寝たきりで自分で寝返りすらできなかつたんだ。それがグロリアが遊びに来るようになってから徐々に自分で動けるようになって、今じゃあの通り。車イスでどこへでも行けるようになってまでなつた。ミサエさんだけじゃない。グロリアが来るようになってからみんな生き生きとしてきたんだ」

信じられない話だつた。確かに『病は気から』とよく言うけれど、たつたそれだけのことであんなにも元気になれるものなのだろうか。「ホント不思議な子だよ、グロリアは。正直言つてあの子が来るまではこのホームもうまくいってなかつたんだ。気ばかり焦つてな。けど、あの日いきなりあの子がうちへやってきて、気が付いたらみんな活気に満ち溢れていたんだ」

「グロリアってこの人じゃないんですか？」

「残念ながらね。うちで働く気はないかって誘つてるんだが、ずっとここにはいられないからって断られちまつた」

グロリアは謎だらけの少女だつた。だけど、ここの人たちにはそんなことは関係ないみたいだつた。グロリアが来てくれればいい。そんな感じだつた。

「筒井は会うたびによく君の話をしていたよ」

急に話題が逸れた。

「テストで百点とつてきたとか、身長が少し伸びたとか、自分に似てガリガリにやせているけど大丈夫だろうか、仕事が忙しくてかま

ってやれないからすまないって」

父さんが。

「そう思っているんならどうして僕に直接言ってくれないんですか？」

「照れ臭いんだろう。そういうことがすんなり言えるタイプじゃないからな」

「そんなの卑怯じゃないですか！ 僕はいつもいつも勉強ばかりやらされてずっとひとりぼっちだったんですよ。日曜日だってみんなみたいに父さんと遊びたかったのに」

何を言ってるんだよ、僕は。この人に言っても仕方ないことないに。

園長さんは困ったような顔で僕を見る。きつと頬を流れている涙のせいだ。

「克彦くん。君も一度でもそのことをお父さんに言ったことがあるかい？」

僕は首を横に振る。言えていれば今こんなに自暴自棄になってたりしない。

「言わなくなつて親ならそれぐらいわかるでしょう！」

「親だつて完璧じゃない。わからないことだつてある」

「そんなの言い訳ですよ！」

「克彦くん！」

園長さんの大声に僕はビクツとなる。

「あ、すまない。大声出して」

「いえ……」

「口止めされてただけで、いいか」

園長さんは気まずそうに頭をポリポリかいて話を続けた。

「もう十年くらい前になるか。筒井病院の入院患者が看護婦の点滴ミスで死んじまったことがあるんだ。当時マスコミとかに騒がれて大変だつたんだなあ」

十年前って、おじいちゃんが隠居した頃じゃないかな。僕は小さ

かったからよく覚えてないけど。

「筒井は十年かけてやっと病院の信用を取り戻そうとしているんだ」
だから、だから僕にかまっているヒマがなかったとしても言いたい
んだらうか。そんなの親の都合であって僕には……僕には。

「僕帰ります」

居たたまれなくなり、僕は入ってきたドアとは別の・・ロウカ側の
ドアを開けて、逃げるようにして老人ホームを後にした。

「カツヒコ」

しばらくしてグロリアが僕を追ってきた。けど、僕は歩みを止めなかった。

「待ってったらー」

追いついたグロリアに後ろから抱きつかれる。女の人に抱きつかれるのは初めてだった僕の脳みそは爆発した。ただでさえ熱い体ますます熱を帯びて、汗が吹き出る。

「もうひどいよ。勝手に帰っちゃうなんて」

「あ……はなれ……て」

満足にしゃべることもできなかった。

「え、何？」

「はなれて!」

やっとはつきり言えると、グロリアはパツとはなれた。た、助かったあ。

「急に帰っちゃうからミサエさんたち心配してたよ」

僕の脳は今すぐに答えを言える状態ではなかった。

「カツヒコ、どうしたの？ 顔が赤い」

グロリアは心配して僕の額に手を当てる。治まりかけていた熱がまた上がっていく。

「熱あるみたい。大丈夫？」

大丈夫なわけがない。

「あ、あの園長さん何か言ってた？」

「カツヒコは用を思い出したから先に帰ったって」

「そう」

僕はホツとしていた。

「用ってなあに？」

「そ、それは……」

実際には用などあるわけがないのだから答えようがなかった。

「忘れちゃった」

そう言うしかなかった。

「だったら私につき合って」

「つき合って、って……？」

「だって用事忘れちゃったんでしょ？」

すたすたと歩いて十字路でそのまま直進しようとしていた僕の体を、グロリアは強引に左へ向ける。家の方向だった。

「どうして僕がいつしよに行かなくちゃならないんだよ？ どうしてそうやって僕にかまうんだよ？」

「いつしよにいたいっていうのは理由にならない？」

それって、どういう意味？ 怖くて僕にはそれ以上聞くことができなかった。

結局、僕はまたグロリアに引き込まれてしまっていた。

「こっつて……」

僕はあ然とした。

いやな方向へ進んでいるとは思っていたけど、まさか本当にうちの病院に来るなんて。

今度はお見舞いかあ。グロリアってボランティア活動してる人なのかな。ずっとここにはいられないようなことを園長さんに言ってみたんだけど。いや、宗教の教えを広めているという説も考えられる。まだ疑いが晴れたわけではない。

「カツヒコ、こっちこっち」

グロリアが正面玄関の前で手招きする。それだけは勘弁してほしい。今日は午後から休診だけど、正面から入ったら父さんたちに見つかる可能性は高い。

僕はグロリアの手を引いて裏口へ回る。

「へえ。こつちにも入り口があったのね。いつもベランダから入るから気付かなかった」

「ベランダ？」

ベランダって、一階にはベランダはないはずんだけど。どこかと勘違いしてるのかな。僕はそのことにあまり気にも止めず、西側の階段で上がっていく。グロリアが用があるのは二階の小児科病棟だった。三階と四階が内科病棟になっている。各階の部屋数は八つ。西側に四人部屋が三つ。東側にふたり部屋が三つとひとり部屋が二つある。

グロリアは階段を上がってすぐの二〇八号室に入っていく。

ドアの横には四人の名前を書いたプレートがある。

「やつほー、みんなあ。おりこうさんにしてたかなあー？」

「あ、おねえちゃん」

「おねえちゃんだー」

子供たちが一斉にグロリアに飛びついてくる。しかも、ひとりやふたりではない。七、八人はいる。こっつて四人部屋じゃなかったっけ。

「ちゃんとお昼寝はしたかなー？」

「はいー！」

子供たちは幼稚園児か小学低学年生ぐらいばかりだった。

「おねえちゃん、きょうはどうしておそとをとんできてくれなかったの？」

「ねえ、どうしてー？」

「きれいなはねをみせてよー」

子供たちがグロリアにせがむ。

外を飛んでくる？

きれいな羽根？

この子たちは何を言ってるんだろう。

「はいはい」

僕はその光景をぼーっと見ていた。子供たちも僕には無関心といった感じだ。

ばさつ。

グロリアの背中から何か白いものがふわりと広がったように見えた。

あれは。

天使の翼……？

「うわぁー」

子供たちは感激の声を上げて、それに見惚れていた。

うそだ。これは夢なんだ。現実であるはずがない。

グロリアが本物の天使だなんて……。

ありえるはずがないんだ。そんなことあるはずが。

「何だよ。翼なんて見えないじゃんかよ」

静まり返った病室内に水を差す声。

みんなは声の主に注目する。窓際のベッドにいた男の子に。小学五、六年生くらいかな。よく陽に焼けていて元気そのものって感じでも病人には見えなかった。

「お前らが天使天使っていうから来てやったの。何だよ、でまかせか」

小学生らしからぬ生意気な口調だった。

「あの子は？」

「じゅんくんだよ」

グロリアの問いにひとりの女の子が答える。

「きのうきたの。おねえちゃんがきたときはずっとけんさしてたんだよ」

「してたんだよ」

「お前ら余計なこと言ってるじゃねえよ」

新入りの割には年のせいが一番えらそうにしているなあ。何かサ
ル山のボスって感じになってるよ。

「こんにちは、ジユンくん。私はグロリア。よろしくね」

グロリアはじゅんくんのほうへ歩いていく。

「別によろしくされるつまりはないよ」

じゅんくんはすたすたと病室を出ていった。今時の子っていうの
かなあ。中三でこんなにも年の差を感じるなんて。

「ねえねえ、おねえちゃん。きょうもいろんなおはなしきかせてよ
ー」

「

きかせてよー」

追いかけてようとしたグロリアの手を子供たちが引つ張る。

「カツヒコ」

そんな目で見ないでほしい。言いたいことは何となくわかる。

「ジユンくんの所へ行ってあげて」

やっぱり。短時間だけど、少しだけグロリアの性格がわかってき
た。

「僕が？」

「やっぱり男の子は男の子同士のほうがいいんじゃないかなーって」

どうして僕なんだよ。子供の相手なんかしたことないのに。

「わかったよ」

グロリアの背中から翼はもう消えていた。

錯覚？

僕は子供たちといっしょに幻影を見ていたんだろうか？

じゅんくんの病室は向かい側の二〇五号室だった。

「みやぎじゅん宮城純、くんか」

プレートには純くんの名前しか書かれていなかった。ようはひとり部屋みたいなものだ。

僕はノックして中に入った。

「何だよ。何か文句でも言いに来たのかよ？」

「ずいぶんと攻撃的な口ぶりだった。苦手かも。」

「あ、いや、その」

子供相手に僕は何を戸惑っているんだろう。とはいっても、何を話せばいいのか僕にはわからなかった。

ただひとつだけ確かめてみたかった。

「その、さっきは本当に見えなかったの？」

「何がだよ？」

「だから、その、グロリアの羽根が……」

「見えたに決まってるだろう」

「へ？」

「にーちゃん目医者行ったほうがいいぞ」

「じゃあ、さっきはどうして見えないって？」

「なんとなく、だよ」

あっけらかんと言う純くん。そう言われてしまったらもう何も聞けない。

けど、やっぱりあれは見間違ひなんかじゃなかったんだ。

「用がないのなら、にーちゃんもう出てってくれよ。練習のじやまになっから」

純くんはベッドの下からサッカーボールを取り出すと、膝へ胸へ

頭へと巧みにボールを弾ませる。えっと、リフティングっていうんだっけ。

へえー、器用なんだなあ。

小五の時にやってれば、僕もこれぐらいはできてたかもしれない。「何だよ。にーちゃんもやりたいのかよ？」

子供の目でもすぐにわかるくらいに、そういった顔をしていたんだらうなあ。

「でも、僕やったことないんだ」

「一度も？ 体育の時間とかでやったことないのかよ？」

「見学してるほうが多かったんだ」

「かつこ悪いな、にーちゃん」

事実だけに返す言葉がない。

「純くんうまいんだね」

「つたり前だろう。これでもオレは少年サッカーチームのエーストライカーだぜ」

純くんは頭の上のボールを弾かせて、僕のほうへ向ける。

僕はそれを両手で受け取った。

「何やってんだよ。サッカーは手を使っちゃいけないことくらい知ってんだらう」

「あ、ごめん」

「そういう時は胸で受けるんだよ、胸で」

僕は純くんにボールを手渡す。

「ずいぶんと元気がいいんだね」

「すぐにでも退院したいのに、あのババアがまだだめだって言いやがるんだ」

ババアって、きっと母さんのことだらうな。

「オレはどこも悪くないって言ってただけどさー。早くサッカーがやりたいよ」

「サッカーがそんなに好きなの？」

「まあな。オレの夢はプロのサッカー選手になってワールドカップ

に出場して日本を優勝させることなんだ」

「この時の純くんはすつごくまぶしく見えた。夢ってこんなにも人を輝かせるものなんだろうか。」

「生意気でかわいくない子だと思ってたけど、話していくうちにだんだん純くんは僕にいろんなことを話始める。」

「このことは内緒だからな。言つとすぐみんなバカにして笑いやがる」

「そんな……バカにするなんて」
「うらやましいくらいだよ。」

「にーちゃんの夢は何だ？」

「僕の？」

「そうだよ。オレだけしゃべったら不公平じゃなかよ」

「僕の夢は……」

「答えることができなかった。だって、今の僕には夢なんかないんだから。」

「もしかして、ないのか？」

「い、今考えてる最中なんだよ」

「早く決めたほうがいいぜー。夢のない人生なんてつまんねえーぞ」
「子供に諭されている。情けない。」

「でも、純くんってしっかりしてるなあ。最初はとげとげした子かと思つてたけど、けっこういい子だ。」

・ ・ ・コンコン。

「ドアをノックする音がした。」

「純くん？」

「この声は……母さんだ。」

「どうしよう。まだ会いたくないよ。」

「何してんだよ、にーちゃん」

「僕は思わずベッドの下に潜り込んだ。」

「ごめん。僕がここにいるの黙ってて」

ドアが開くと、僕からは足先だけが見えた。こっちに歩いてくる。
「純くん調子はどう？」

回診かあ。でも、母さんひとりってのは変だな。

「絶好調だよ。だから早く退院させてくれよ。もうすぐ地区予選が始まるんだからさー」

「今日お母さんは？」

「仕事だよ」

子供が入院しているっていうのに、母親は仕事か。どこも同じなんだなあ。

「夕方には来るんじゃないかな」

「そうなの。じゃあまたその頃に来るわね。それと、サッカーは禁止よ。早く退院したかったら安静にしてなさい」

それだけ言っただけで母さんは出ていった。

僕はベッドの下から出る。

「にーちゃんも医者嫌いなのか？」

「そんなとこかな」

僕は純くんの横に座った。

「純くんはひとりでいて淋しくないの？」

「とーちゃんもかーちゃんも生きていくために一生懸命働いてるんだぜ。さみしいなんて言ったらバチが当たるぜ」

その言葉を聞いて僕を少なからずもシヨックを受けた。僕よりも年下の子がこんなことを考えてるなんて。僕は両親のことをそんな風に思ったことなんてなかった。

今まで悩んでいたのはいったい何だったんだろうか。だんだんバカバカしく思えてきた。

「子供だって自立しなきゃなんないんだぜ」

「すごいんだね、純くんって」

「にーちゃんが子供なだけだよ」

「……………」

負けた。しっかりしてるよ、純くんは。尊敬に値するよ。

「それよかさ、にーちゃんオレの練習につき合ってくれよ」

「でも、サッカーは禁止だって母さんが」

僕は慌てて口を押さえた。けど、もう手遅れだ。しっかり聞かれている。

「にーちゃん、あのババアの子供なのか？ ははーん。病院にずっといるからかまってもらえなくていじけてんだなあ」

子供のくせにどうしてそう人生悟ったようなことを言うかな。最近の子はませてるというかしっかりしているというか。中三にしてもう年寄りの気分だ。

「そんなんじゃないよ」

「いいっていいって。気にすんなよ。みんな一度は通る道なんだからな」

すっかり年上気取りである。

「ほら、にーちゃん。早くボール投げしてくれよ。ヘディングの練習すっからさ」

純くんが僕にボールを渡す。いいのかなあ。

僕と純くんは病室のギリギリまで端と端に離れる。僕は純くんに言われた通りに頭のほうに向けてボールを投げる。それを純くんが頭で受けて僕に弾き返す。

そのの繰り返しだった。

しばらくして、純くんの呼吸がだんだん乱れてきていることに僕は気付いた。

「純くん、少し休もうか」

「まだまだいけるよ」

と言った瞬間。

純くんは膝をついた。

「純くんっ？」

僕は慌てて駆け寄る。

「へーきだつて。ちよつと胸がドキドキしてるだけだよ。いつものことだから、すぐ治るって」

「いつも？」

「そうだよ。サッカーやってる時とか」

もしかして純くんの病氣って。

心臓病？

だとしたら、純くんの夢はどうなる？

サッカー選手になってワールドカップに出場して日本を優勝させるっていう夢は。

母さんは純くんの夢を知っているんだろうか。

知りたい。純くんの病氣のことを。

「純くん、ちよつと待ってて」

僕は病室を出た。

僕はまずナースセンターへ行つて純くんのことを看護婦さんに頼むと、その足で一階の院長室に向かった。たぶん母さんはそこにいるはずだから。本当はまだ母さんたちに会いたくないんだけど、確かめたかった。純くんの病氣のことを。

昼からは休診になつて一階はしーんと静まり返っていた。

院長室は診察室の隣にあった。

僕はドアの前で立ち止まる。やっぱりいざとなると足がすくんで中へ入れない。僕はドアを少しだけ開けて中の様子をうかがった。

父さんと母さんが見える。ふたりとも当然診察着のままだ。

父さんがイスに座っている母さんにコーヒークップを手渡している。

「どうしたんだい、君らしくないじゃないか」

「結局、私もお母さんと同じだったんだってことを痛感させられたわ」

話し声が聞こえてくる。その会話に僕は聞き耳を立てた。

「私も物心ついた時から『お前は筒井病院の跡取りだから医者になるために勉強しなさい』って言われ続けてきたわ。けっこう重荷だったのよね。だから、自分に子供ができた時には自由にさせてやるうって思ってたの。なのに、私は克彦に私と同じ思いをさせてきたのよね。今朝あの子に『僕は母さんの人形じゃない』って言われた時はとてもショックだった。子供の頃の辛い気持ちをすっかり忘れてしまっていたわ。このまま克彦が戻ってこなかったら、私……」

「和枝ばかりは責められないよ。僕は病院を再建させることに専念してきて克彦のことは全部君に任せてしまっていたからね」

家にいる時にふたりが話しているのってほとんど記憶になかった。

こんな風に話してるのを聞くのは初めてじゃないかな。そして、いつも気丈な母さんがあんなに気弱になっているのも。いつも顔を合わすと勉強しろって目を吊り上げてるのに。

親だつて完璧じゃない。

園長さんの言った言葉を思い出す。

ドアノブをつかんでいた手が自然に動いた。

ドアが開いていく。

「克彦？」

母さんは持っていたコーヒーカップを落とす。割れはしなかったけど、残っていたコーヒーが床に広がっていく。

「母さん……今朝はごめんなさい」

「克彦……」

母さんは僕に抱きついてきた。泣きじゃくる母さん。まるで子供みたいだ。

母さんってこんなに小さかったかな。

僕の中で母さんへの憎しみが消えていく。

「母さんこそ許してちょうだいね。克彦の気持ちも考えないで」「うっん」

今までのことがまるでうそのように心が軽かった。僕は知らず知らずに心に壁を作っていたのかもしれない。けど、もうそんな壁はどこにもない。

「父さん、希望園の園長さんから聞いたんだ。僕何も知らないで……」

「克彦が謝ることじゃない。お前に心配を掛けまいとして隠していた父さんたちが悪かったんだ」

僕よりも頬の角張った顔の父さんはいつも気難しそうにしているけど、この時はすぐ照れ臭そうにしていた。園長さんの言った通りだった。

「父さん今度僕と遊ぶ時間を作ってほしいんだ」

僕も照れ臭かった。

「そつだな。これからはなるべく克彦といられるように時間を作るよ」

今まで思っているも口に出せなかったことが言える。自分でも不思議だった。

たった半日ですいぶんと自分が成長したような気がした。グロリアに振り回されているんな人たちに会えたおかげだろうか。

希望園の園長さんやみさえさん。

病院の子供たち。

純くん……。

「母さん、昨日入院してきた宮城純くんのことなんだけど」

「あなた知ってるの？」

「教えてほしいんだ。純くんの病気のこと」

急に母さんの表情が変わった。母親から医者へと。

「いくら息子でも患者の病名を教えるわけにはいかないのよ」

「心臓が悪いんじゃないの？」

母さんはピクリとも表情を変えなかった。さすがは何年も医者をやっているだけのことはある。

「母さんは純くんの夢知ってる？」

「ええ。昨日お母さんから聞いたわ」

「だったら」

「克彦！」

声を上げたのは、父さんだった。

「病院のことに口を出すもんじゃない。母さんに任せておきなさい」

確かにそつだ。僕が口を挟むべき問題じゃない。

僕は何て非力なんだろうか。純くんの病気を治すこともできないし、夢を叶えさせてあげることもできない。

これからも純くんと同じ思いをする子供は増えていくかもしれないんだ。

僕に何かできることはないんだろうか。

この時、僕は自分が目指すものを見つけたような気がした。

「父さん、母さん。僕は小児科医になりたい」
「克彦？」

母さんはびっくりしていた。

「誤解しないでほしいんだ。これは母さんたちに言われて無理矢理なるんじゃないかって僕の意志で決めたことなんだ」

「どうして小児科医になんて……」

「子供たちの夢を病気なんかで終わらせたくないんだ」

これだけはハッキリと言えた。僕の夢は子供たちに夢を叶えさせることなんだ。

「そう。でも、小児科医はけっこう大変よ。今はなり手も少ないって言うから」

「うん。だけど、僕がんばってみるよ」

母さんはまた泣いていた。けど、今度のはうれし涙だと思う。

僕は純くんの病室に戻った。自分の夢を純くんに伝えたくて。「

にーちゃん、医者になんのか？」

ベッドの上の純くんはずいぶんとオーバーに驚いてくれた。

「この病院ももう終わりだなあ」

「失礼な言い方だなあ。将来は知らない人がいないくらいの名医になってるかもしれないのに」

「オレが有名選手になることはあっても、にーちゃんが名医になることなんてないぜ」

「だったら競争だ。どっちが先に有名になるか」

「いいぜー。にーちゃん後でしまったって思ってもおせえんだからな」

純くんは歯を剥出しにして思いつきりの笑顔を見せてくれた。少し胸が痛んだけど、僕は純くんの夢が叶うことを祈った。

翌日、純くんは大学病院へ移ることが決まった。結局、病名はわからないままだった。

墮天使の涙

「グロリア？」

僕は二〇八号室へ顔を出した。病室には誰もいない。みんなベランダのほうに出ていた。

空を見ている。

「ねえ、お姉ちゃんはどこに行っちゃったのかな？」

僕はベランダに出て、とりあえず子供たちの中で一番年が上の女の子に聞いてみる。

「とんでちゃった」

と、空を指差す。僕はその先を見る。さすがに五時前でもまだ太陽の日差しが強い。

飛んでったって、ここ二階だし、家が周りにないから屋根に飛び移るなんて芸当ができるわけがないし。

「もうきてくれないって」

「おねえちゃんもうこないの？」

その横にいた小さい女の子が涙目で僕を見る。

「もう来ないって、おねえちゃんが言ったのかい？」

「うん。ほかにいくところがあるからって」

グロリアの言葉を思い出し、子供たちが泣き始める。

困ったなあ。こんな時はどうすればいいんだろう。小児科医を指すと決めた以上は、子供たちの扱いにも慣れておかないとだめなんだろうなあ。

「大丈夫だよ。お姉ちゃんはまたみんなの所にも来てくれるよ」

子供だましなうそしか思いつかなかった。きっとこれは僕の願望でもあったんだと思う。けど、子供たちは僕の言ったことを素直に信じて喜んでいた。

グロリア、本当に天使だったんだろうか？

グロリアがいるような気がして、僕はあの公園に行ってみた。もう時間も時間なので、遊んでいる子供たちはいない。

誰もいない公園。

「やっぱりいない」

僕は最後の望みを断ち切られたような気がして、がっくりと肩を落としてベンチに座った。グロリアと初めて言葉を交わしたこのベンチに。

幻だったんだろうか。いや、そんなことない。僕はしっかりと覚えていてる。

グロリアの顔、声。

そして、その温もりを。

もう一度会いたい。会ってお礼だけでも言いたかった。今日ここでグロリアに会わなかったら。今の僕は存在していない。母さんたちとうまくいったのも全部グロリアのおかげなんだ。宗教の勧誘とかって疑ってた自分が恥ずかしい。

最後の悪あがきと知りながら、僕はここでグロリアを待った。会いに来てくれるような気がして。

だんだん陽は沈んでいき、外灯に灯が燈る。それでも僕はグロリアを待った。

ふいに肩を叩かれ、僕は弾けるように立ち上がった。

「グロリ……ア」

じゃなかった。

「と、友成くん……？」

今朝と変わらぬ出立ちの友成くんが僕の前に立っていた。僕は顔が硬張っていくのを感じた。

コンビニでの万引きを僕のせいにして逃げた友成くん。できれば文句のひとつでも言ってやりたかったけど、僕は彼の右手を見て驚愕した。

友成くんの右手に握られている血のついた包丁。よく見れば服の所々に血がついている。

「ど、どうしよう。俺おふくろ刺しちまった」

顔面蒼白になってガクガクと震えだす友成くん。服についた血はその時の返り血だろう。

「助けてくれよ、筒井」

「お、落ち着いてよ、友成くん。いったいどうしてこんなことになったんだよ？」

「おふくろが勉強しろ勉強しろってあんまりうるさいんでカッとなつて。気が付いたらおふくろが血だらけになって倒れてて。俺怖く なつて逃げてきたんだ」

泣き続ける友成くん。

僕も一歩間違えばこうなっていたかもしれない。グロリアに出会わなければ。

「こういう時はどうすれば……。やっぱり警察に。」

「とにかく警察に行こうよ。そんな格好で歩いてればすぐに誰かが通報しちゃうから」

「お前それでも友達かよっ！」

差し伸べた僕の手を友成くんは振り払う。ガクガク震えながら両手で包丁を構える。

「友成くん？」

「なあ、俺たち友達だろう？ 筒井が刺したってことにしてくれよ。おふくろが俺を殴ろうとしたから助けようとして包丁で刺したってことだし。正当防衛だよ」

友成くんの目は正気を失っていた。

「まだ十五才だし、名前だつてバレやしない。もしも少年院に行くことになつたつてすぐに戻つてくれるよ」

「できないよ、そんなこと」

震える声で僕は言う。本当の友達ならこんなことはしないと
思うんだ。

「そうかい、わかったよ！ やっぱりお前も他の連中と同じなんだ
な」

友成くんは目を剥き出してくる。

刺されるかもしれない。

僕は怖くって動くことも助けを呼ぶこともできなかった。

何が友成くんをここまで追い込ませてしまったんだろう。出会っ
た頃のおとなしかった友成くんの面影はどこにも見当たらない。こ
こにいる友成くんはまるで悪魔のようだった。

悪魔……。

そういえば、グロリアが言った。悪魔は純粋な人の心を変えて
いく、って。

僕は友成くんの背後に黒い影を見たような気がした。

「筒井、死んでくれ。俺のためにさ。後はうまくやっておくからさ」
友成くんが包丁を構えて僕に突進してくる。

いやだっ！

僕はまだ死にたくない。やりたいことがいっぱいあるんだ。
すべてがスローモーションに見えた。

僕に向かってくる友成くん。

僕の前に現われたグロリア。

そして、友成くんの包丁は僕にはなく、グロリアの胸に突き刺
さった。

「……………っ！」

声にならなかった。

お腹に包丁が刺さったまま、グロリアが僕の足元に倒れこむ。

「俺……何を？」

我に戻ったのか、目の前の惨劇に友成くん顔が恐怖で歪んでいく。

悪魔はもう友成くん心から去ってしまったんだろうか。

「知らない。俺は何も知らないよ。そんな目で俺を見るなよ、筒井」

僕はどんな目で友成くんを見ていたんだろうか。

恐怖？

軽蔑？

憎しみ？

それとも、哀れみ？

「うわああああああっっ！」

友成くんは絶叫して走っていった。

僕には追い掛ける勇氣はなかった。

「カツ……ヒコ」

「グロリアっ！」

僕はグロリアをそっと抱き起こした。包丁は胃の辺りに深々と刺さっていた。

けど、彼女の体から血は流れていなかった。

「彼を許してあげてね。悪魔から助けてあげることができなかった

……私のせいだから」

「今はそんなことどうでもいいよ！　すぐに病院に」

グロリアは首を横に振った。

「いいの。私はミカエルさまの元に戻るだけだから……」
「そんな」

「悲しい顔しないで。ちょっと間だけだから」
グロリアの白い肌がだんだん青白くなつていく。僕は涙があふれ
て止まらなかつた。

言わなきゃ。泣いてるヒマなんてないんだ。

「グロリア……僕医者になるって決めたんだよ。母さんたちとも仲
直りできた。全部グロリアのおかげだよ。ありがとう……」

グロリアが伸ばしてきた手で僕の涙をぬぐう。

「やっと見れた、カツヒコの笑顔……」

「僕の？」

「カツヒコいつも泣きそうな顔ばかりしてたんだもん。だから、笑
つてほしかったの」

声音が弱くなつていく。

「グロリア、グロリア！」

「ステキだよ……カツヒコの、笑顔」

グロリアの笑顔が薄らいでいく。

「グロリアっ！」

グロリアの体は光に包まれて……消えていった。

残った包丁だけが虚しく地面に落ちる。

もうグロリアはいない。

「グロリアああああああああっっっ！」

僕は声が枯れるまでその場でずっと泣いていた。

彼女は落ちこぼれなんかじゃなかった。

僕にとってかけがえのない人だった。

僕に夢を与えてくれた……天使。

一週間後。

友成くんは市内の山奥で発見された。変死体となつて。

当時は『某中学校生徒実母殺害の果て、山中で自殺』などとメディアで騒がれ、学校へはマスコミがやってきて大騒ぎになっていたけど、それも何カ月も続きはしなかった。

事件は人々の記憶の中から消えていった。

でも、僕は一生忘れることはできない。自分の弱さに負けて、初めてできた友達を助けることができなかつたんだから。

エピソード

「もう二十年も経つのかあ」

公園のベンチに腰掛けて、僕はひとり呟く。

夏がくるたびに思い出す。あの日のことを。初めてできた友達の友成くんは悲しい最後を遂げた。あの時、追い掛ける勇気が僕にあれば友成くんは死ななかつたかもしれない。

今そんなことを考えても結果論にすぎないんだろうけど。

日曜日の昼下がり。これから子供たちが増えてくる時間だ。

家に帰るかな。

そう思つて立ち上がると、

「ぱぱあ」

かわいい声が聞こえてくる。

三才になつたばかりの我が息子・大樹^{だいき}だ。よたよたとこちらへ走ってくる。

今では僕も一児の父親だ。

僕は向かつてくる大樹を抱き上げる。

「よくここがわかつたね」

大樹の後を彼女が歩いてくる。ウェーブのかかつた長い髪と真っ白なワンピースの裾が少しだけなびかせながら。

「希望園に行つたらさつき帰つたっていうから、たぶんここじゃないかなと思つて。パパをお迎えにきたのよねえ、大樹」

「うん！」

彼女が大樹の頭を軽くなでてやると、大樹は大きくなつた。

「そっか。ありがとう、大樹」

僕は大樹を肩車してやる。少し重くなってきたのでちょっときついものがあるけど。

ぎゅるるるるう。

僕のお腹の虫だった。

「お昼また食べてないんでしょう?」

「うん、まあ」

「そんなことだと思ってた」

「今日は何作ってくれる?」

「克彦の大好きなオムライスよ」

グロリアはいつもと変わらぬ笑顔で答えてくれた。

おわり

エピソード（後書き）

ラストで更新を怠ってしまいました。すみません。

そして、最後まで読んでくださった皆様ありがとうございます。

一言でも感想をいただけたら励みになります。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2758e/>

墮天使の涙

2008年11月7日07時29分発行